

「聴き取る力」を育てる音楽科の実践研究

～ 聴き取った音楽から思考判断する活動を通して ～

永吉 由紀（長与町立長与北小学校）

福井 昭史（長崎大学教育学部）

1 研究の目的

小学校音楽科の主な活動は歌唱や器楽であるが、それらの能力の育成には、鑑賞の授業を含む聴く活動が重要な役割を果たしている。そこで本研究では、児童の聴き取る活動に着目し、その様態、聴取の過程、聴取と表現の関わりなどを明らかにするとともに、聴取の過程で思考判断する活動が重要であることを明らかにすることを目的とする。

研究主題にある「聴き取る力」とは、音楽の聴取によって、音楽の曲想や要素を聴き取ったり、表現に際しては、表現の違いや音色等を聴き取ったり聴き分けたりすることができる能力のことである。従って本稿では「聴き取る力」を、音楽に対する聴取力と識別力を合わせた能力ととらえることとした。

人は聴こうとする要素などに注目することでより深く聴き取ることができるようになるため、授業では聴き取る視点を与えることが重要であり、そのような活動の中で「聴き取る力」が育成されると考える。これまでの「聴き取る力」についての研究は、主に鑑賞の授業での活動を対象としており、表現活動での考察や実践は少ないのが実状である。

また「思考判断する活動」とは、互いの演奏を聴取するなどして、どちらがよいのか、また、どうしたらよい演奏になるのかなどについて、児童自身が思考し判断することであると考える。なお「思考判断する活動」についての研究は、多くの場合、自分の意図や思い、楽譜などを基にどのように演奏するのかを思考判断することと捉えられており、聴取の結果からの思考判断を対象とする研究はほとんど見られないのが実状である。

2 学習指導要領における「聴く活動」

学習指導要領では、表現や鑑賞のそれぞれの活動の中で聴き取る力を育てることが示され、そのための活動や指導のねらいが述べられている。改訂で新しく示された「共通事項」には、音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどの音楽の要素とそれらによって生み出される曲想や音楽の面白さ、美しさが聴き取る内容として具体的に示されており、表現と鑑賞がそれぞれに独立しているのではなく、表現で学んだ内容を鑑賞で、鑑賞で学んだ内容を表現で生かす

ことが求められている。本研究では、主にこのことについて取り上げる。

3 音楽科授業における聴く活動の実際

音楽の授業の中の聴く活動は多様であり、それらの聴く活動の構造を分析し、図1のような構造図に整理した。この図では、子どもが聴き取る対象となる媒体、聴き取る内容、聴くことの目的、そのための活動などを具体的に示した。

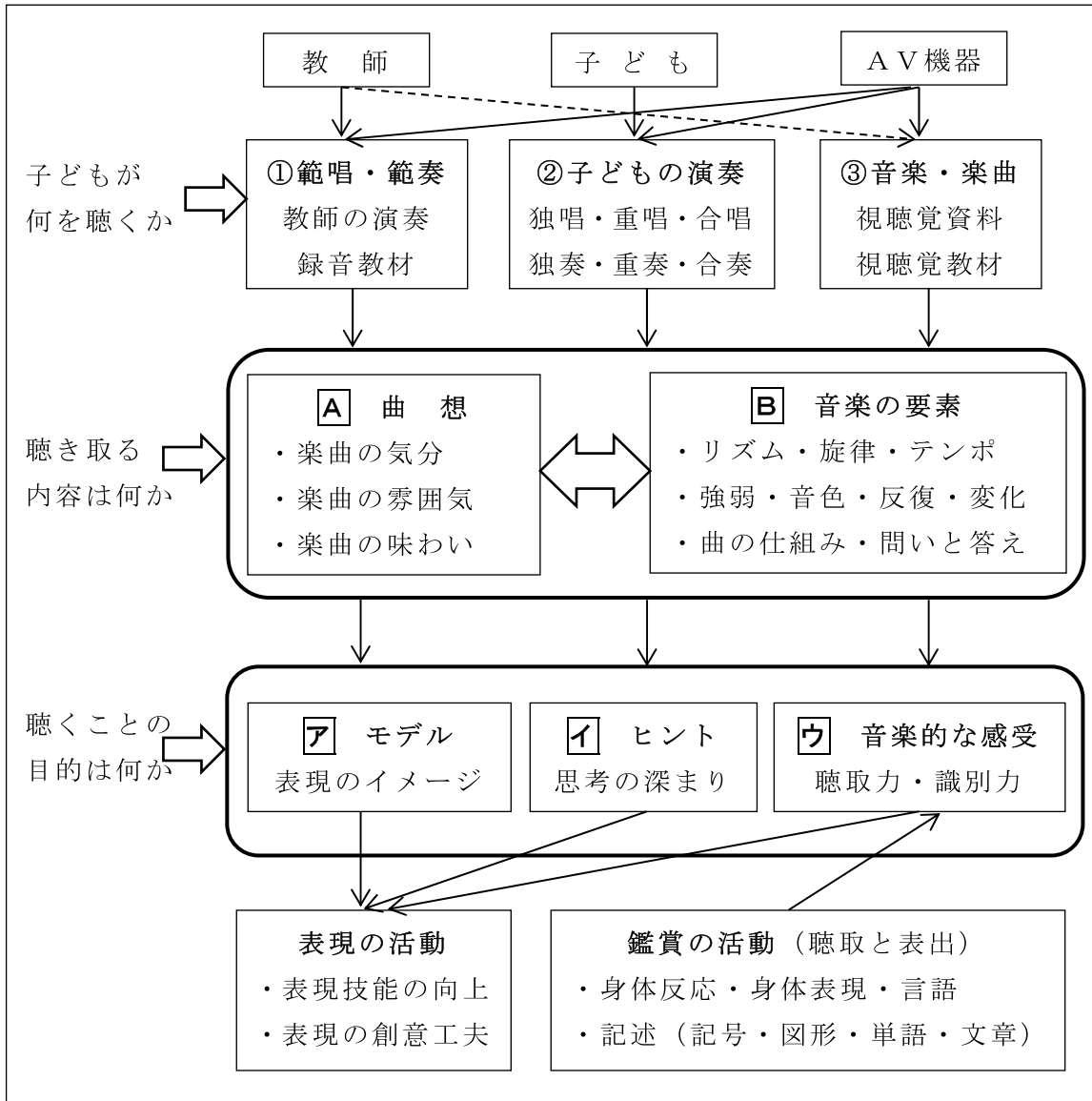


図1 聴く活動の構造図

(1) 子どもの聴取の対象

授業で子どもが聴き取る対象には、教師やAV機器による「①範唱・範奏」、独唱・重唱・合唱や独奏・重奏・合奏などの「②子どもの演奏」、AV機器による再生や教師の演奏による「③音楽・楽曲」などがある。

(2) 子どもが聴き取る内容

聴く活動を通して、子どもたちが聴き取る内容は、曲想と要素の2つに大別で

きる。

曲想とは、楽曲に固有な気分や雰囲気、味わい、表情を醸し出している楽曲の特徴や演奏のよさ等である。曲想を生み出しているのは、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みである。

音楽の要素は、音色、リズム、旋律、強弱、音の重なり、和声の響きなどと反復、問いと答え、変化などの音楽の仕組みのことであり、学習指導要領では共通事項などに示されている。

(3) 子どもが聴き取る目的

音楽から曲想や要素を聴き取ることの目的は、これから表現しようとする演奏などのモデル、表現を工夫するためのヒント、及び、曲想や要素からそれらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取る音楽的な感受そのものである。

(4) 聴き取ることの構造の考察

聴き取ること、また、その能力は音楽の活動を支える基盤であり、それなしでは、表現の活動も成立しないと考えられる。指導に当たっては、聴き取らせたい内容を明確にし、子どもたちが聴き取ることができるように授業を仕組んでいかなければならない。また、聴き取った内容から子どもが思考判断をする場が必要である。

表現の活動では、自分たちの演奏を聴き取ることで、その状況を自覚し、改善の方策を思考し判断することになる。このような聴く活動と子どもの思考の構造を踏まえた授業を計画し実践を通してその検証を行うこととした。

4 小学校における「聴く活動」を重視した授業の実践

長崎市内A小学校で、授業観察と聴く活動を主とする授業を実践した。

(1) A小学校での授業観察

永吉が大学院の教育実習で参観したA小学校での歌唱、器楽、音楽づくり等の授業から、聴く活動に焦点を絞り考察を行った。その結果、音楽の活動は聴く活動に支えられていることが明らかになり、指導に当たっては、教師が聴き取る内容を明確にし、それらを聴き取らせるための工夫をしなければならないということが明らかになった。

聴く活動の構造を図示したように、音楽の要素の聴き取りができないと、その後の目的が達成されない。特に音楽を聴かせても、聴く視点を児童に持たせていないと児童は何を聴いていいのかわからないようである。授業では、児童が聴き取って感じ取ることができなかつたため、目的を達成することはできなかつた。そのため児童が聴き取ることができるように、授業の展開を改善したり発問を工夫したりして、授業を仕組まなければならないことがわかつた。

また鑑賞では、音楽から聴き取ったことをどのように表出させるのかということが重要であることがわかつた。聴取の目的が達成されているかは、外見では判断しにくいいため、身体反応や身体表現、記述を用いる等、児童の表出のための手

立ての工夫が必要であることがわかった。

個々の授業の考察は以下のとおりである。

(2) 第6学年の歌唱の授業実践

4クラスで6年生を対象とする歌唱の授業を実践し、クラスの実態から、2グループに分け考察した。

題材名 「歌声をひびかせよう」

目標 歌う声と話す声の違いを知り、響きのある歌う声で歌うことができる。

- 1 「われは海の子」を歌って録音し、地声で歌っていることを聴き取る。
- 2 歌う声を出すためのよい姿勢や顔の表情を知る。
- 3 教師の範唱を聴き取り、できるだけ真似をして歌う声の出し方を練習する。
- 4 最後に再度録音し、最初の録音と比較聴取する。

① 地声で歌う児童がいるクラスのグループ

地声で歌っていることを自覚していなかったため、授業ではまず教師の範唱により地声と歌う声を聴き取らせた。両方を聴き比べることでその違いを捉えさせることができた。その後自分たちの演奏を録音したものを聴かせることで、児童は地声で歌っていることを聴き取ることができた。地声で歌う理由の一つは、自分たちが地声で歌っているということを聴き取れていないためであると考えられる。

② 歌う声で歌う児童がいるクラスのグループ

授業の当初から地声で歌っている児童は少なく、そのため最後の演奏と聴き比べても、地声で歌っていたクラスほどの変化は見られないが、児童たちは前後の違いを聴き取ることができていた。自分たちの歌う声をいつも耳にしており、特に高い声は授業前から歌う声で歌うことができていたため、よい声がどんな声であるのかを理解していたと考えられる。そのため比較することで、微妙な違いであっても、それらの違いを聴き取ることができたと考えられる。聴取力が地声のクラスに比べて育っていたのではないかと考えられる。

地声のクラスは、聴き取った内容の主は歌う声と地声の違いであったのに対し、歌う声のクラスは息継ぎの仕方や音の伸び、響きの深さなど、歌う声で歌うことによる、表現の違いにまで及んでいた。普段からよい音（声）を聴くことで、さらに細かいところまで聴き取る力が育っていると考えられる。よい音楽を普段から聴かせることは聴取力の育成につながるといえる。

③ 全体を通しての考察

比較聴取は児童にとって音楽の要素を聴取し識別する有効な方法であるため、教師の範唱や自分たちの演奏から歌う声か話す声かを聴き取ることができ、自己の演奏に生かすことができたといえる。

歌う声の定着を図るには、自己の演奏を聴き比べながらの練習が有効であった。

自分で演奏しながらその状態がどうであるかを聴き取るのは難しいため、録音は有効な手段である。このような活動を繰り返すことで、児童の中に、声のイメージが形成され、歌声が変化したと考えられる。

児童に思考判断を促す働きもある比較聴取は大切な活動であり、そのような場面を学習指導の過程で工夫する必要がある。音楽の要素を聴取できても、その後の表現につなげなければ意味がない。教師は児童自身が思考判断できるような授業を仕組む必要があるといえる。

(3) 第4学年の鑑賞の授業

木管楽器と金管楽器の音色を聴取する授業をそれぞれ1時間ずつ実践した。

題材名「いろいろな音色を感じ取ろう」

目標 オーケストラで使われる代表的な木管楽器（金管楽器）の音色を聴き取ることができる。

- 1 オーケストラで使われる代表的な木管楽器には4種類あることを知る。
- 2 木管4重奏の演奏を視聴する。
- 3 それぞれの楽器の特徴を知り、言葉で音を書き表し、再度視聴する。
- 4 フルートとクラリネットの曲を聴き、4つの中のどの楽器の演奏か聴き取る。

① 時間配分について

最初の授業では楽器の説明に時間をかけ過ぎ、児童に楽器の印象をもたせ続けることができなかつた。音色に対する印象が消えないうちに、次の活動を入らなければならなかつた。そこで展開を改善し、映像を視聴し音の高さや音色、印象を確認しただけで2回目の視聴を行った。これらの視点を与えたことで、それぞれの音と楽器とを結び付けて聴くことができ、前回よりも楽器の音に対する多くの意見が見られた。このことから1回の視聴ではなく、視点を与えて繰り返すことで聴取が深まることが分かった。

② 映像の効果について

映像の活用は効果的であった。最初の授業では別の楽曲を聴かせた後、楽器を確認し再度聴取したが、音色を識別できない児童が多かつた。そこで展開を改善し、最初は音楽のみの聴取とし、視聴で確認した。聴覚のみのため音色に集中することができ、確認の視聴が効果的であった。この活動で児童は音色を識別し、楽器の音色などについての知識が形成されたといえる。

③ 教室の音響効果について

自宅のCDプレイヤーと音楽室のスピーカーからの音では、同じ鑑賞用のCDでも聴こえ方が違っていた。最初に聴取させた楽曲は、フルートの音色がわかりにくい演奏であったため、2回目はフルートの音色が鮮明な演奏に変えた。教室で実際に児童に聴かせる機器を用いて演奏を確認する必要があるといえる。

④ 聴き取る視点について

児童は音楽を聴いても何に注目して聴いてよいのかわからないとただ漠然と聴き取ることになる。また、教師が聴取のねらいを伝えても、焦点を絞れないこともあることが分かった。そこでの確かな聴取ができるように手がかりとなるヒントを与えたり、聴取結果を整理したりして、視点を持たせる必要がある。そのような視点を持った聴取が重要であるといえる。

⑤ 表出させる言語について

聴き取った内容を記述することで自分の考えを明確にし、さらにそのことを話し合うことで、自己の鑑賞能力の伸長を実感することができる。このことはグループ活動等では、自信を持って自分の考えを伝えることにつながっていた。音楽については言葉だけでは理解できないことがあるため、話し合いの後に、再度聴取し確認することが重要であるといえる。

⑥ 全体を通して

最初の授業では楽器の音色を聴取することができず、プリントに記述のない部分がある児童が目立った。改善した授業では、楽器の音色の知識が形成され、意見やプリントの書き込みも多く見られた。

児童は集中して音楽を聴き、聴き取ろうとする姿勢が見られた。聴取の視点を与え、聴き取りながら思考し判断するように授業を仕組むことで、児童は目的に集中して聴取することができた。このような活動を繰り返すことによって児童の聴取力が育成されると考えられる。

(4) 第5学年の歌唱の授業

初めて3部合唱の響きを味わうことを目標とした授業を3回実践した。

題材名 「和音の美しさを味わおう」

目標 声の重なりを感じながら、歌う声で3部合唱をすることができる。

- 1 範唱CDの演奏を聴き、曲想をつかむ。
- 2 主旋律を歌う。
- 3 3部合唱を練習する。
- 4 クラスを半分に分けて、それぞれ3部合唱を聴き合う。
- 5 3部合唱の演奏を録音し、自分たちの演奏を聴く。

① ピアノでの歌唱指導について

歌の練習で正確に歌えない箇所は、教師がピアノを弾いて歌わせていたが、ピアノの音はアクセントが強いため、児童の歌声にもアクセントが付いていた。範唱は表現のモデルとなるため、教師の歌声を聴かせて練習する方がよい。

② 自分たちの声の思考判断について

授業の最後に録音した自分たちの声を聴取する場を設けた。これは自分たちの声の実態を知り、活動の課題を考える思考判断の場となった。また、授業の途中の合唱も、児童が思考判断する場である。演奏後に教師が問題点を指摘する場面

もあるが、児童自ら課題に気付く場面を設定しなければならなかった。

③ 3部合唱の聴き取りについて

授業の後半に、クラスを2グループに分け、互いの合唱を聴き合う場を設けた。人数が半分になると各パートの人数はさらに減るため、普段から少ない人数で歌う経験をしていない児童はうまく合唱できなかつた。数名の児童に、全体の3部合唱を聴取させる方法がよかったといえる。もう少し歌い込んでから互いに聴取させるのであればまた違ったであろう。思考判断する場の設定は、それまでの児童の経験や実態、授業の流れ、表現技能の獲得の程度等を考慮する必要があると感じた。

④ 聴き取った内容について

自分たちの演奏を聴いた後の振り返りの中で、1回目の授業では声が小さいことと歌う声で歌えていないことを全体の3分の2以上の児童が挙げていた。2回目では音の重なり、バランス、声の質をあげている記述が半数になり、3回目では、音の重なり、バランス等その関わりについて書かれているものがほとんどであった。また、「もっと練習したい」や「もっと上手になりたい」と次時への意欲がみられる意見が多かった。よい演奏ができると、聴き取る内容もそれに合わせて様々な要素を関連付けて聴き取ることができるようになっていた。自分の向上が実感できると「もっとやりたい」「もっと上手になりたい」と児童の意欲も向上した。

⑤ 全体を通して

3部合唱の練習を一つ一つの和音として取り上げた最初の授業は、練習に時間がかかり、最後まで3部合唱をすることができなかつた。展開を改善した授業では、大きなフレーズで練習することで、児童は横のつながりから和音をつかみ、3部合唱をすることができた。和音は音の縦のつながりであるが、長いフレーズで見た方が和音の移り変わりがわかりやすいため、和声の横のつながりを大切に合唱しなければならないことがわかった。

5 考察

本研究では授業における「聴く活動」を取り上げ、児童の聴く過程をたどり、聴き取られたことがどのように表現や鑑賞に結びついていくのかを分析した。また聴き取ったことから思考判断する場を取り入れることで、聴き取る力を育てられるのではないかと考えた。

以上の視点による実習校での授業を観察し分析するとともに、3題材の授業計画を作成し実証授業を実践した。それらの授業を分析し次のように考察を行った。

(1) 聴く活動の構造

聴く活動を整理すると構造図のように、何を聴くのか、それによって聴き取る内容は何か、またその目的は何かなどに分けることができる。この図からは、すべての音楽活動は聴く活動に支えられていることがわかり、聴き取ることができ

なければ、表現することもできないと言える。教師はこのことを踏まえ、聴く活動を授業の中に適切に位置付け、授業を展開しなければならない。

(2) 聴かせる音楽

聴かせる音楽は、目的に合ったものを選ばなければならない。特に市販のCD等は、さまざまな演奏があるので、教材研究を十分に深める必要がある。

また、音響機器も重要である。スピーカーやアンプなどの音響機器によって聴こえる音が変わるので、教師は児童に聴かせる機器で音楽を聴き、教材として適している演奏を選択しなければならない。

歌唱の練習でも、教師が意図する要素が聴き取れる音を選択しなければならない。聴いたものがそのまま表現につながるので、できれば教師による範唱・範奏が一番よいと考える。目的に合ったよい音楽を聴取させることが大切である。

(3) 聴き取る内容の明確化

児童は、何も示されずに音楽を聴いた場合、何を聴いてよいのかわからず、ただ漠然と聴くだけである。教師は聴き取らせたい曲想や要素を明確にし、聴取の視点を児童に示す必要がある。曲想や要素の聴き取りができないとその後の表現の技能の向上や創意工夫にはつながらない。違いがわからなければ表現を向上させることはできないと考える。

(4) 聴くことの目的

聴くことの目的は構造図に示したように「ア」モデル、「イ」ヒント、「ウ」音楽的な感受がある。モデルとして聴く場合、児童は表現のイメージを持つことができる。ヒントとして聴く場合は、自分たちの演奏をどのようなものにしたいという思考の深まりにつながる。音楽的な感受は、どのように児童が感じ取ったのか表出させる必要がある。その方法としては、身体反応や身体表現、記述、言語等がある。表現の活動の中でこの「ア」、「イ」、「ウ」は、技能向上や創意工夫につながり、鑑賞では「ウ」が、聴取力や識別力の育成につながると考える。

(5) 思考判断の場

児童に視点を与えて音楽を聴取させ、その内容から思考判断する学習活動を仕組むと、児童は集中して音楽を聴くことができる。ただ単に音楽を聴かせて、そこからどのような要素を持っているのかということをごちらから示すのではなく、児童の思考から次の課題を設定させ、判断させることが次の活動につながる。

比較聴取は思考判断に有効である。一つの音楽を聴いて判断するよりも、複数の音楽を聴き比べることで違いや特徴を捉えやすくなる。自分たちの演奏を聴き比べながら練習を重ねることで、聴取力が伸長すると考える。このような場面を意識して授業を展開する必要がある。比較聴取は児童にとって分かりやすく有効な手段であることが分かった。

(6) 聴取力を育てる

児童の表現活動では、音楽を聴き、表現の違いを聴き取ることが必要である。表現の技能が高くなれば、聴取力や識別力も高くなる。表現の違いを聴き取るこ

とのできる聴取力や識別力は、思考判断したり、視点を持っていろいろな音楽を聴いたりする中で育っていく。聴き取る力は、授業の中で、それまでの児童の経験や実態、授業の流れ、表現技能の程度等に応じて、聴き取った内容から思考判断する場を取り入れていくことによって少しずつ育っていくものと考ええる。

児童が視点を持って音楽を聴くことで、曲想や要素の働きを感じ取り、それらの違いを感じ取ったり、判断したりして、表現活動に取り組むようになる。このような活動の中で聴き取る力が育成されると考える。さらに表現で学んだ内容を鑑賞で、鑑賞で学んだ内容を表現で生かすことにもなると考える。

このような学習指導を心がけることによって、音楽科の目標が達成されると考える。

参考文献

- ①文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 2008年
- ②金本正武『子供と音楽のかかわりを深める音楽科授業論』東洋館出版社 1997年
- ③福井昭史『音楽指導ハンドブック音楽科授業の指導と評価』音楽之友社 2004年
- ④公益財団法人音楽鑑賞振興財団『季刊音楽鑑賞教育 Vol.14』2013年
- ⑤吉見美奈子『音と身体による表現活動を通して、「聴く力」を育てる指導法の有効性』日本学校音楽教育実践学会紀要9 2005年
- ⑥内藤 梓『「聴く」活動から始まる音楽教育の可能性—新しい鑑賞教育のあり方を求めて—』岩手大学大学院教育学研究科修士論文 2006年
- ⑦群馬大学教育学部・附属学校共同研究推進センター『たくましく生きる力をはぐくむ』はばたく群馬の指導プラン・音楽から 群馬県教育委員会 群馬県小学校長会中学校長会 2012年
- ⑧藤澤克彦『聴く力を身に付け、音楽を学ぶ楽しさがわかる児童生徒の育成』岐阜大学附属中学校 平成23年度研究紀要 音楽から 2011年